

世界日報 81.10.8



青函トンネルの技術顧問を

務めたのが地質学の泰斗。日韓トンネルに始まる国際ハイウエー構想との出会い、八一年末のことになる。日本山岳会の先輩、西堀栄三郎・日本生産性本部理事から「見せたいものがある。日本では君が一肌ぬいでやってみないか」と渡されたのが、国際文化財団創設者・文鮮明師の同ハイウエー提唱のリーフレットだった。

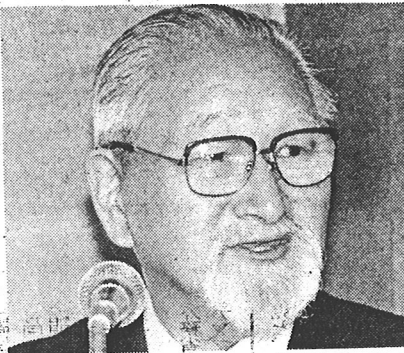
以来、今回の調査斜坑起工に至るまでの五年間は「九州、東京、札幌（北大）間をフリーコのように行ったり来たりの日」。

今、この民間ベースで着々と進むこの計画。「とにかく、韓国の人々の関心と期待

を呼び起こすことが大切。且本に対する歴史的な恨（ハ）ンをいかに解消していくか。トンネル建設を喜んでくれる

調査斜坑の起工にこぎつけた日
韓トンネル研究会会長

佐々 保雄さん



明治40年3月北海道生まれ。昭和5年東大地質学科卒。昭和19年北大教授。日本鉄道建設公団青函建設局地質顧問。理学博士。

るようなムードづくりが急がれます」と、日韓両国民の心の海峡へ配慮を忘れない。北大で教えること四十年。学生にいつも説いてきたの

自然観察を重んじる地道な地質学者らしい人生哲学だ。趣味は山登りらしいと言うが、本格派で日本山岳会第十四代会長を務めたほど。

東大の学生時代には、内村鑑三という「巨人」をじかに仰いだ。その聖書研究会に三年間、在籍。自ら「内村の不当の弟子」と謙遜する。

「青函は（墓碑銘の第一句）I for Japan だった。今度の日韓トンネルは（第二句）Japan for the World だね。これで少しは先生の教えに近づけますかな」と笑う。日韓トンネルは「余生をささげてあまりある大ロマン」と少年のように顔を輝かせる。そのあとで「完成はおそらく来世紀。百歳まで生きられればね」とも。

横から同研究会九州支部長・高田源清九大名誉教授の無邪気な声が割りこんできた。「（完成したトンネルの中を）一緒に肩組んで歩きたいやうな」

とたんに、上品な白い口ひげがほころんだ。

（池田 年男記者）